

# ピケティ『21世紀の資本』 訳者解説 (v.1.1)

2015.1.23-2.1

山形浩生

hiyori13@alum.mit.edu

# 今日の構成

- 1. 『21世紀の資本』とピケティのえらさ
- 2. あらすじ:  $r > g$  から格差拡大へ
- 3. 格差是正の処方箋は？
- 4. ピケティ本の受容・誤解・批判
- 5. 日本への示唆とは？
- 6. 落ち穂拾い

# まずはじめに.....

- ピケティの本と、ピケティの他の論文での記述と、ピケティがインタビュー等での発言とは、分けて考えよう！
  - 本がいちばんストイック。たぶん意図的に書いていない話もかなりある。
  - 前二つは、それなりにきちんと考えてまとめたものだけど、インタビューは(特に日本のことなんかは)印象論的なものにどうしてもなる。
    - (ついでに、誤解されやすい部分もあるので注意しよう！)
- ここでは「ピケティ本」に話をなるべくしぼる。

# 1. 『21世紀の資本』とピケティのえらさ

- トマ・ピケティは、もともと数学的な経済学の大秀才。22歳で博士号(格差の数理モデル)、MITに招聘(1993-1995)

余談ながら、ちょうどぼくが学生でいた頃だなあ.....当時はこんな人がいるとはまったく認識していなかったが。

- でも現実から遊離した数学のお遊びになじめず、フランスに帰国。パリ経済学校 (École d'économie de Paris, EEP) 設立に尽力するとともに、格差の歴史的研究に着手

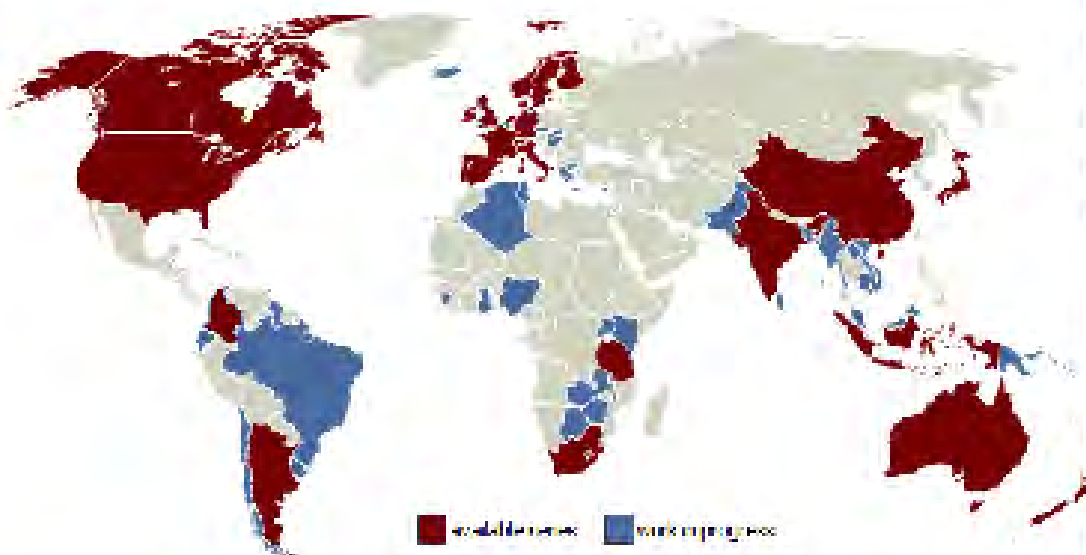
# 1. 『21世紀の資本』とピケティのえらさ

- 格差論は、あまり注目されず、データも不十分
- ピケティ、サエズ、アトキンソンらは、15年かけて世界の税務データを収集
- 格差に注目し、データを自分で作り、それを公開して他の研究者にも開放
  - ある意味、格差論の中興の祖
- ウォール街占拠運動の理論的な支柱
  - 格差論に現実的な訴求力を持たせた
- 『21世紀の資本』は、その一つの集大成
- ちなみに、本書の全グラフやその背景のデータは以下で邦訳公開

<http://cruel.org/books/capital21c/>

<http://topincomes.parisschoolofeconomics.eu/>

## THE WORLD TOP INCOMES DATABASE



[Home](#)

[Introduction](#)

[The Database](#)

[Graphics](#)

[Country Information](#)

[Work in Progress](#)

[Acknowledgments](#)



PARIS SCHOOL OF ECONOMICS



Centre for Long-Run Growth  
INSTITUTIONAL FOUNDATION



## 2. あらすじ: $r > g$ から格差拡大へ

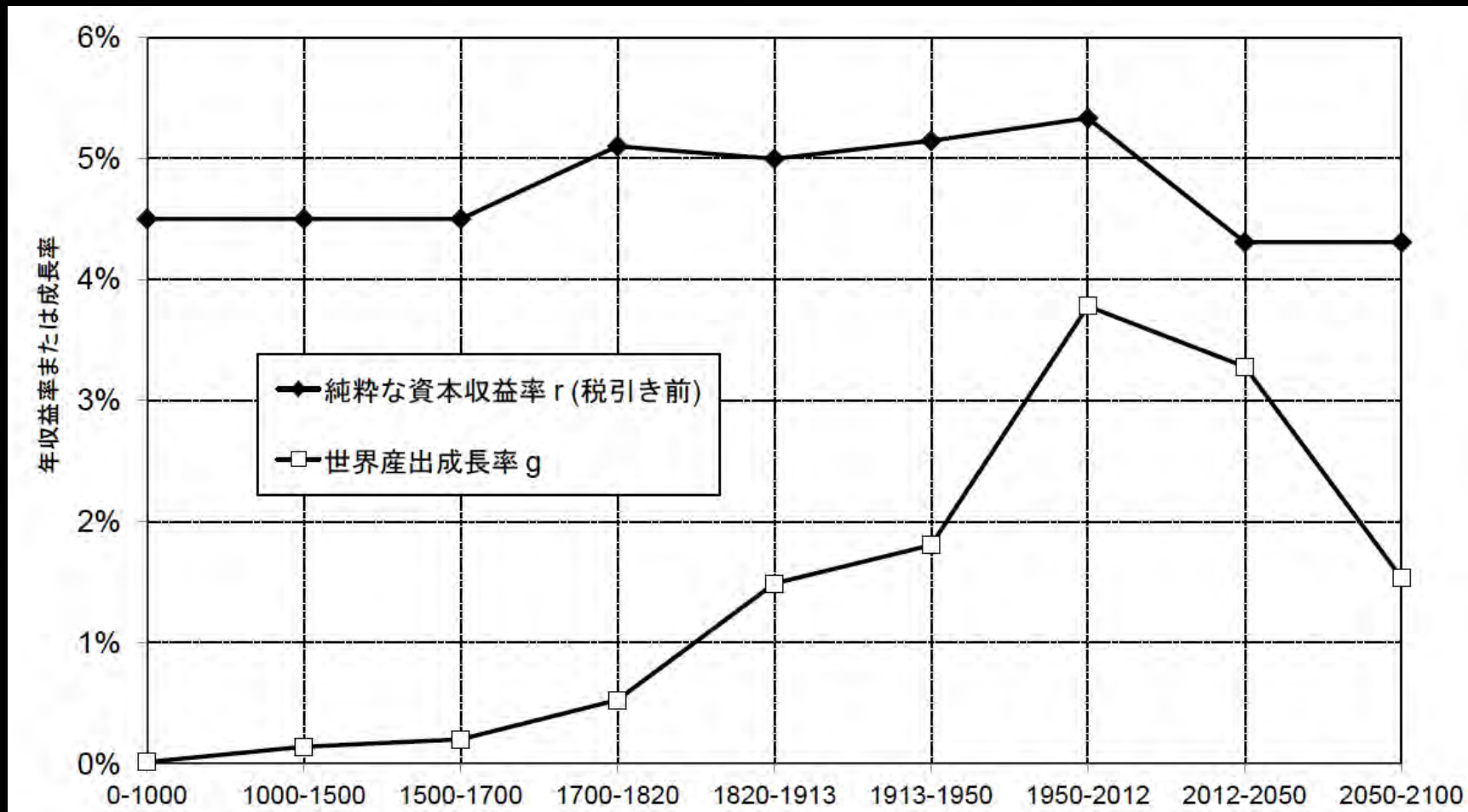
- この本の中心的なメッセージとして以下は周知:

$$r > g$$

資本の収益率  $>$  経済成長率

- これが格差増大をもたらすというんだが.....
- でもこれがどうして格差の拡大に？

# 具体的な規模感から： $r = 4-5\%$ $g = 21$ 世紀は1.5%?

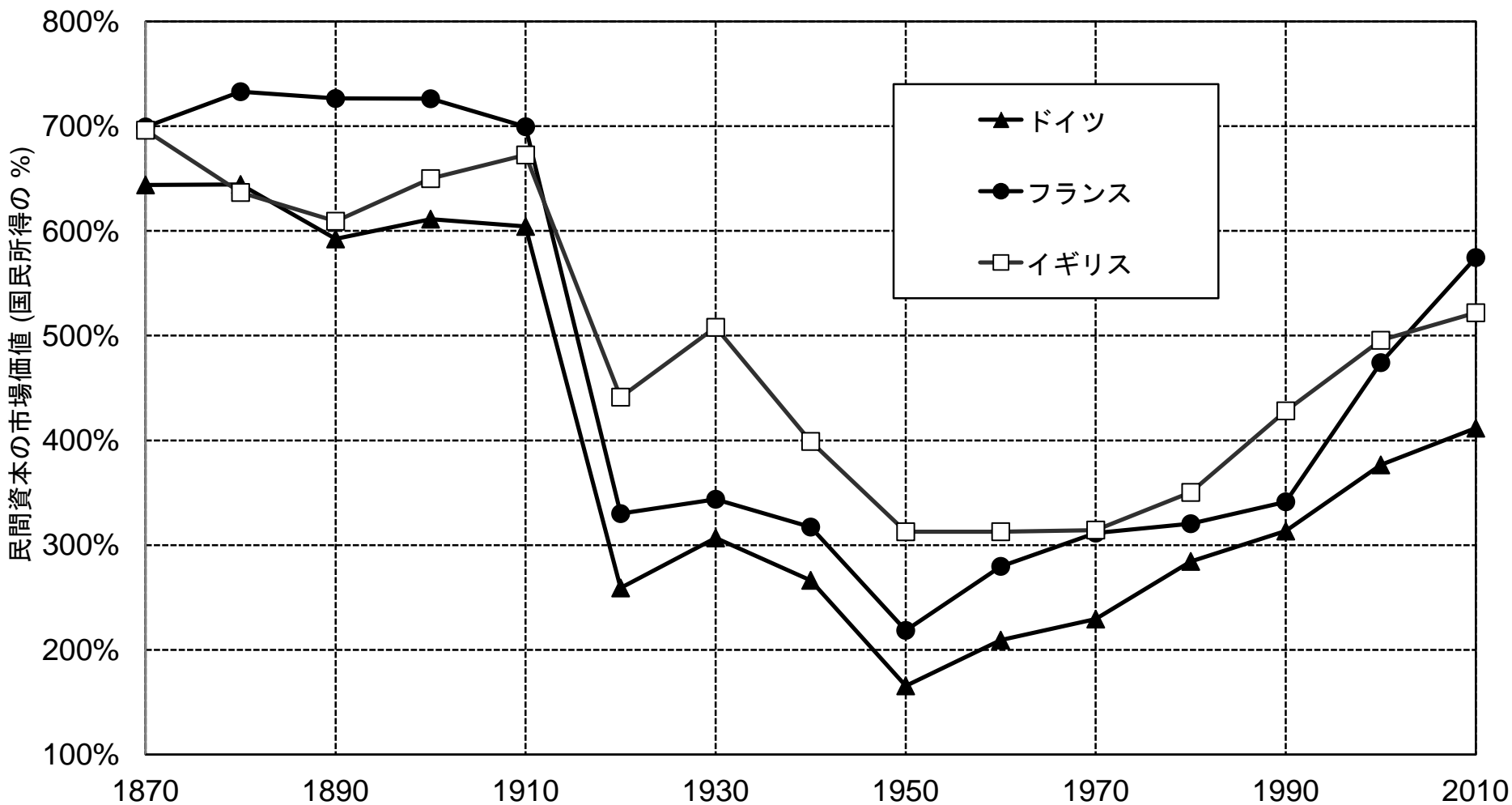




- 資本収益率  $r$  はほぼ一定
  - 資本=資産=財産、借入を引いた純額
  - 昔は農地、19世紀は土地と国債、いまは各種金融資産だが、収益はほぼ変わらない。
- 経済成長  $g$  は、21世紀は低下して1.5%くらいに
  - 20世紀はアメリカの真似で高成長しただけ。
    - ん？ じゃあそのアメリカはどうして.....
  - 70年代のケインズ政策も80年代の新自由主義も長期で見ると経済成長では大差ない
  - 最近の「イノベーション」なんかまるで役立たず
  - 人口増による成長は確実に減る

# 高い資本収益の一部を再投資すると、 経済の中の資本の割合が増える

図 1.2. ヨーロッパでの資本/所得比率, 1870-2010



1910年ヨーロッパでは、総民間資本は国民所得6-7年分くらいの価値があったが、1950年には2-3年分、2010年には4-6年分となった。出所と時系列データ: [piketty.pse.ens.fr/capital21c](http://piketty.pse.ens.fr/capital21c) を参照。

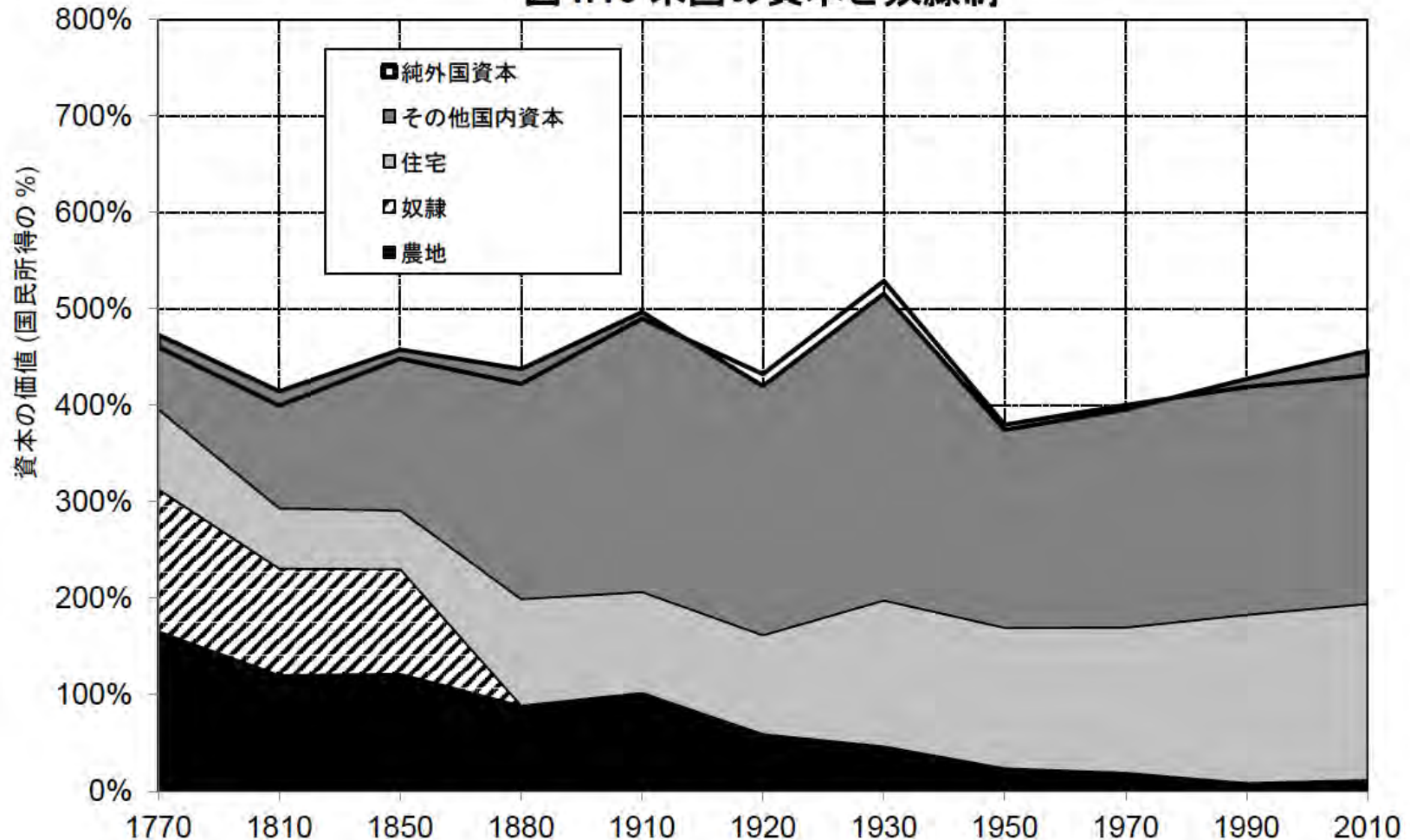
- でも、 $r > g$  だけだと格差増えることにはならん。資本（資産）持ってるやつが、そこからのあがりを毎年すべて使ってしまうえば、次の年も何も変わらず格差は一定のまま。
- $r$  の中で、どのくらい貯蓄 (=再投資) するかで、資本の増え方は変わる。資本が多ければ収益も多く、再投資もしやすく、資本も増えやすい

(これでもまだ格差が広がるという話にはなっていない。経済の中で資本の占める割合が増える、というだけ。その資本をだれが持っているかを見ないと、格差にはたどりつかない)

- さらに、資本が増えること自体は別に悪くない。むしろありがたいこと。(みんなが掃除機や冷蔵庫やコンピュータや車や家を持つようになれば、生活はそれだけ豊かになる！)
  - 問題は、増えた資本がバランスよく社会に分散せず、資本を持っていた人だけがもっと資本を増やす構造になっていること。
- 特に、所得や資産保有のトップ1% やトップ0.1%に極端な富と所得の集中が起きている
- また自分の稼ぎから貯蓄/投資するなら大した格差にならない。でも相続財産が大きくなると、出発点からちがってきて、格差が拡大
- やっとこのページで、格差の話になったことに注目！
  - 実は $r > g$  から格差拡大への筋道は結構面倒。 $r > g$ , その $r$ の一部を貯蓄/再投資で資本増大、その分布が不均一なので格差が広がる、という話。
  - このステップそれぞれ、想定次第で格差のあり方はいろいろ変わってきてしまうことには注意。
  - だから「 $r > g$ は当然、だから格差増大は当然」といった単純な見方は、この意味でチョイとばかし拙速。が、大きくはずれてはいない。

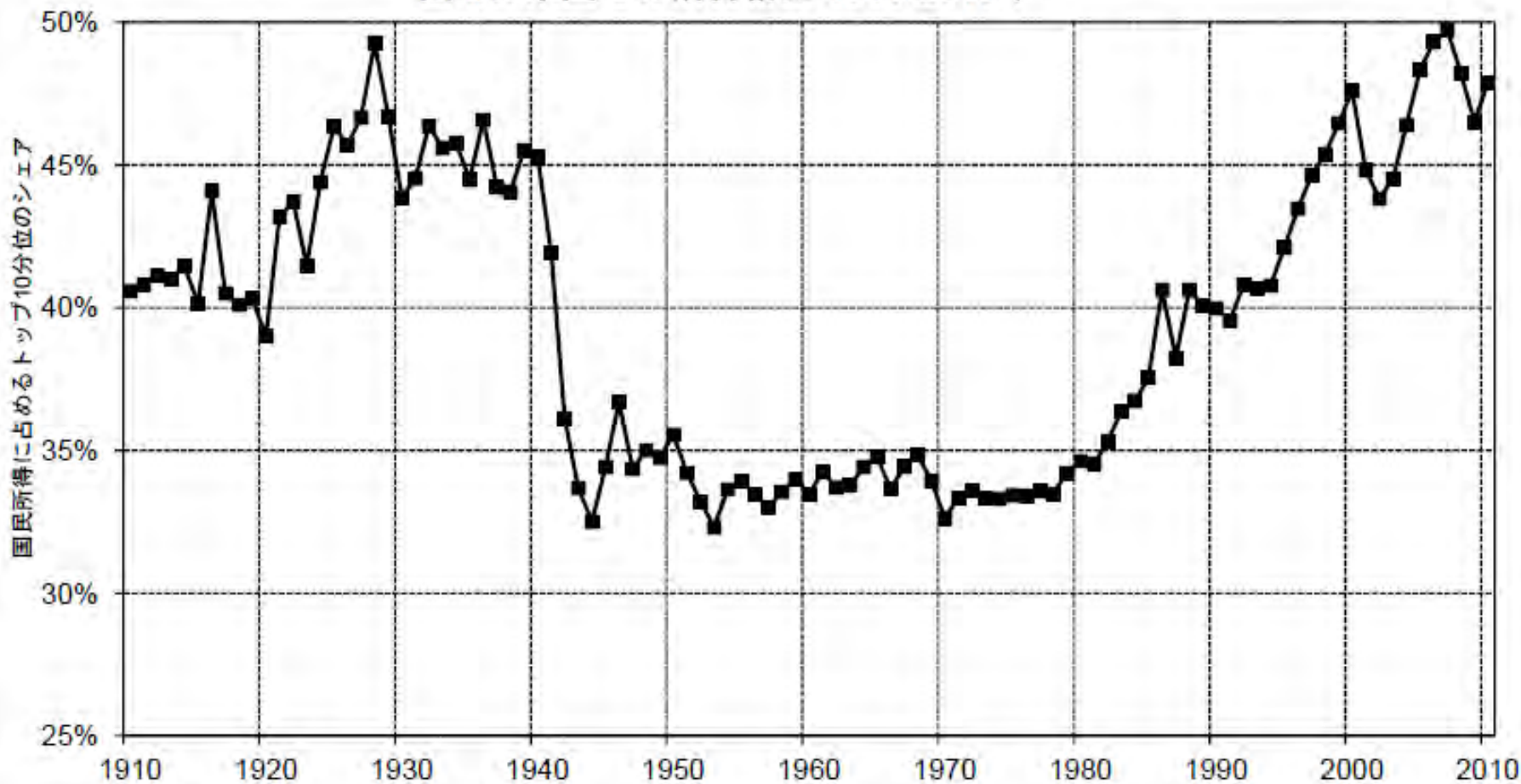
# 不思議なことに、アメリカは例外： $r > g$ での格差拡大が起きていない

図4.10 米国の資本と奴隷制



# かわりに所得の格差がやたらに拡大

図 I.1. 米国での所得格差 1910-2010年



# 「アメリカは例外」にしても.....

- 例外だったって、ずいぶんでかい例外ですよねえ。
- 資本が重要でないなら、後で出て来る資本課税とか、アメリカには当てはまらないんじゃない？
- そういえばアメリカって、経済成長の話のときにも、いきなり世界最先端に踊り出ている、なんかちょっと.....
- が、それは脇においといてください。

# でも、格差が拡大すると何がいけない？

- 実は.....この問いに対する明解な回答は、本書にはない。定性的、情緒的な話になる。
  - 民主主義的、能力主義な価値観と相容れない
  - バルザックやオースティンを使った情緒的な議論
  - 各種革命や動乱は格差拡大で生じた

(が、金持ちのボンボンに対する反発は広く存在するし、世襲財産だけで暮らす層が増えるのがイヤというのはわかる)

- もう一つ、「格差」と「貧困」はちがう。格差が開いても底辺層がどんどん豊かになる場合はあり得る。それは問題か？ (ただし低成長だとこれは起きにくい)
- (実はピケティも、「格差それ自体は問題じゃない」という。底辺層があれば格差があってもいいかも、とインタビューなどで述べてるし、格差がある程度あれば競争促進になると述べている！！)



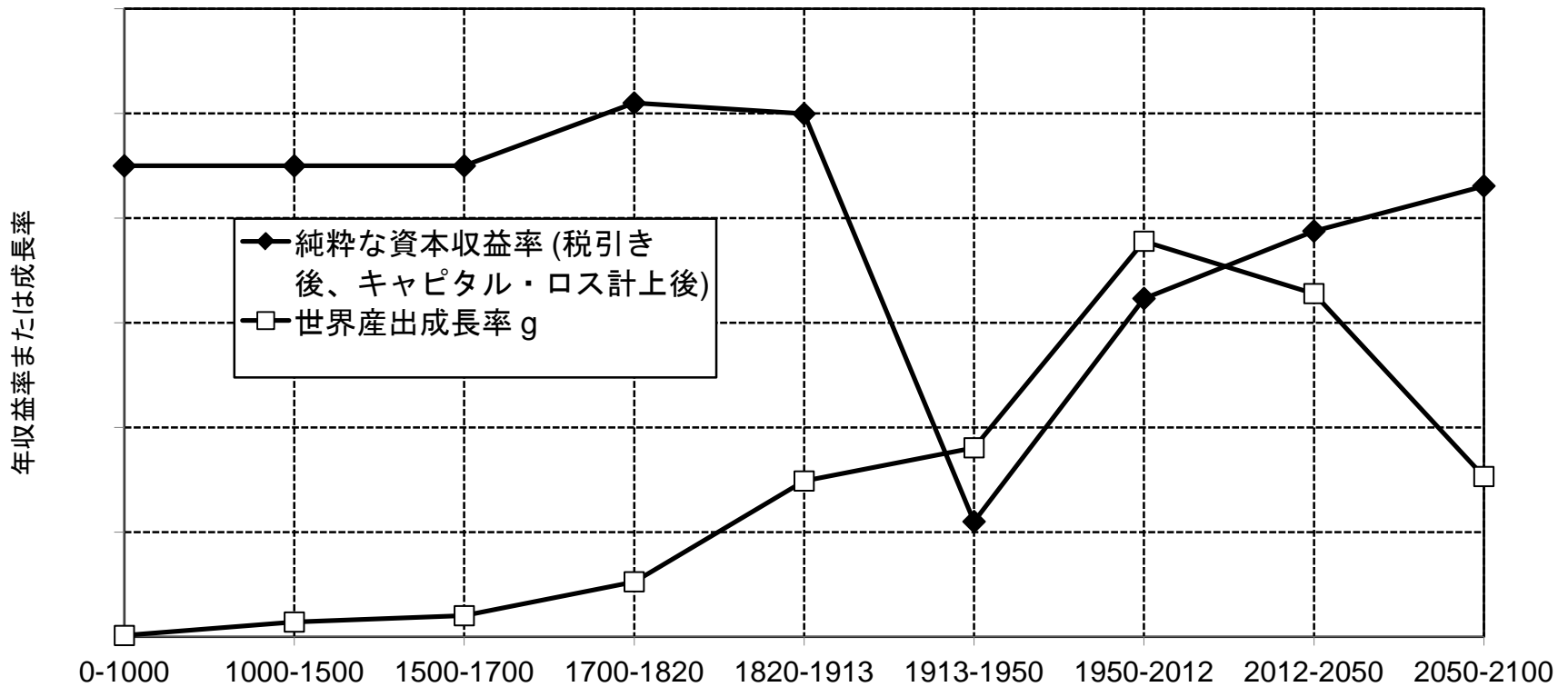
# この程度のことのどこが目新しいのか？

- これまでの経済学(の一部)は、20世紀前半のデータをもとに  $r = g$  と想定していた。
- $r > g$  でも、資本が増えればいずれ  $r = g$  になるはず。
- 格差も、最初は開くがやがて自然に縮まるというのが通説(クズネッツ曲線)。これも20世紀前半のデータだけが根拠だった。
- が、実際に調べたらそうになっていなかった！

(ただし、ちがう想定 of 経済学分野もかなりある。これが現在のピケティ批判の強力な一派)

# 既存経済学のかんちがいは、20世紀半ばが $r > g$ でない例外的な時代だったため

図 10.10. 世界的な税引き後資本収益率と経済成長率 古代から2100年



20世紀中、資本収益率（税引き後、キャピタル・ロス計上後）は成長率を下回ったが、21世紀には再び上回った。出所と時系列データ：<http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>を参照。

# なぜ例外が？

- 格差は自然に縮まったのではなかった。 $r > g$ を緩和逆転させる方策が意図的に講じられた。
  - 高い経済成長
  - インフレによる資産価値激減
  - 戦争と接收による資本の激減
  - きつい累進所得税導入
- つまり政策介入があったので資本収益率が下がり、格差は低減した。
- そして近年の資本集中と格差復活は、こうした介入が80年代に弱まった結果。19世紀の状態に戻りかねない。
- だったら、21世紀にも政策介入しよう！

# ここまでの話と見通し

- ヨーロッパ (や日本) は.....
  - 20世紀初頭までは経済の中の資本集積がとても多い (GDPの6-7倍)
  - それも貴族や大金持ちに集中 (1%)
  - それが戦中戦後に激減。(戦災、インフレ、課税)
  - 最近の規制緩和で昔のレベルに復活
- アメリカは.....
  - 経済の中の資本は少なめ (GDPの4-5倍)
  - でも上位への集中は著しい
  - 上位所得が1980年代から激増。規制緩和のせいです。使い切れないほどだし、これから貯め込むしかないんじゃないの？
  - すると今後は資本が増えるでしょう！ (これは憶測)
- ならば今後21世紀は？
  - ほっとくと、資本の役割は増える ( $r > g$ だから。欧日はすでに、アメリカはこれから？)
  - しかもすでに持っている人がさらに有利になる。
  - すると21世紀は、資本から生じる格差が高まりそう
  - しかも21世紀は経済成長も下がってくるので成長で挽回する見込みも低下

→ なんとかしたほうがいいんじゃない？ 20世紀は対策したら格差減ったし、手立てはあるよ？

### 3. 格差是正の処方箋

- ピケティの一押しは「グローバル累進資本税」
  - 問題が $r > g$ なら、資本に課税して $r$ を下げよう！
  - 資産が大きいほど収益率が高いので、税率は累進的に
  - 外国に財産が逃げないように世界一律で！
  - (ただし税収のためというよりは資産情報を整えるため)
- 自分でも「ユートピア的」と言いつつも、かなり真面目に推している。
  - ただし.....実は本書に登場する格差是正手法は他にたくさんある。

# 『21世紀の資本』格差是正の処方箋

- 実は、過去 (20世紀半ば) に効いて今後も使える手法は、もっと挙がっている。
  - 経済成長
  - 技術の普及と技能向上 (つまりは教育)
  - インフレ
  - 累進所得税
  - 相続税
  - 資産接收/国有化
  - 社会保障などの移転
- 困ったことに本書は「**グローバル累進資本税と比べるとこれは欠点がある**」と言って、他の手法の有効性を認めた次の文でかなり徹底的にdisってしまふ。だからそれが否定されているように見えてしまふ。
- 多くの論者は流し読みしかしていないので、肯定部分と否定部分の好きなほうだけつまみ食いしている！

# 融通無碍に使えるピケティ本

- 例1: 経済成長
  - $g$  があがれば  $r > g$  は緩和されます！ ピケティは経済成長の重要性を示した！
  - でも2章では経済成長は今後上がらないと言ってます！ ピケティは経済成長を否定してます！
- 例2: インフレ
  - 20世紀半ばには効いたし、いまでも格差縮小に有効と言ってます！
  - でもトップ層は回避可能だし、コントロールがむずかしいし、中間層がいちばん被害を受けるし底辺層も物価高できついし、欠点だらけでダメだと言ってます！
- 絶対的にダメと言ってるのか、累進資本税に比べてダメと言っているのか、よく読まないとまちがえる！（でも700ページを「よく読む」のはなかなか.....）

# 4. ピケティ本の受容、誤解、批判

- なぜこんなに人気が出たのか？
    - アメリカでは、金融危機以来不公平感が高まり、ウォール街占拠運動なども起きた。
    - 金持ち層もこうした問題に敏感になっていた。(だから本書が出てFTがすぐ生ヤケな反論を出した)
    - 格差が生じているのか、また生じているならそれは能力やIT普及の自然な結果なのか、すでにかなり論争があった。
  - 日本では？
    - 過去20年のデフレ不況で、特に若年貧困層の問題は大きくクローズアップされてきた。格差への関心があったのかな？
    - 金融緩和に伴い、一部で景気回復があるのにそれが自分にまわってきていないという印象があったのかも
    - 当初、左派系の人がマルクスの再来だとはやしたてたせいかも
- (いずれも無根拠。ぼくに聞かず、買った人々に話をきいて調べて！)



# ピケティ本の長所=短所

- スティックなデータ提示の本。「なぜ」は弱い。「理屈はどうあれこうなっている！」
  - なぜ $r > g$ なの？ → 理由はどうあれそうってます
  - $g$ はなぜ1.5%に？ → 昔そうだったから
  - 格差はなぜ悪いの？ → だってそう思うでしょ？
  - 格差拡大のメカニズムは？
    - かなり定性的な記述で、むしろ「実際に見るとこれだけ拡大してる、トップ層の取り分が増えている」というデータが強み
- 処方箋も、「資本課税して再分配」ではない！
  - $r$ が高いから引き下げろ(そして現状把握しろ)というだけ。そのお金をどこにまわせ、という話は一切なし。

# ピケティ本批判の現在 その1

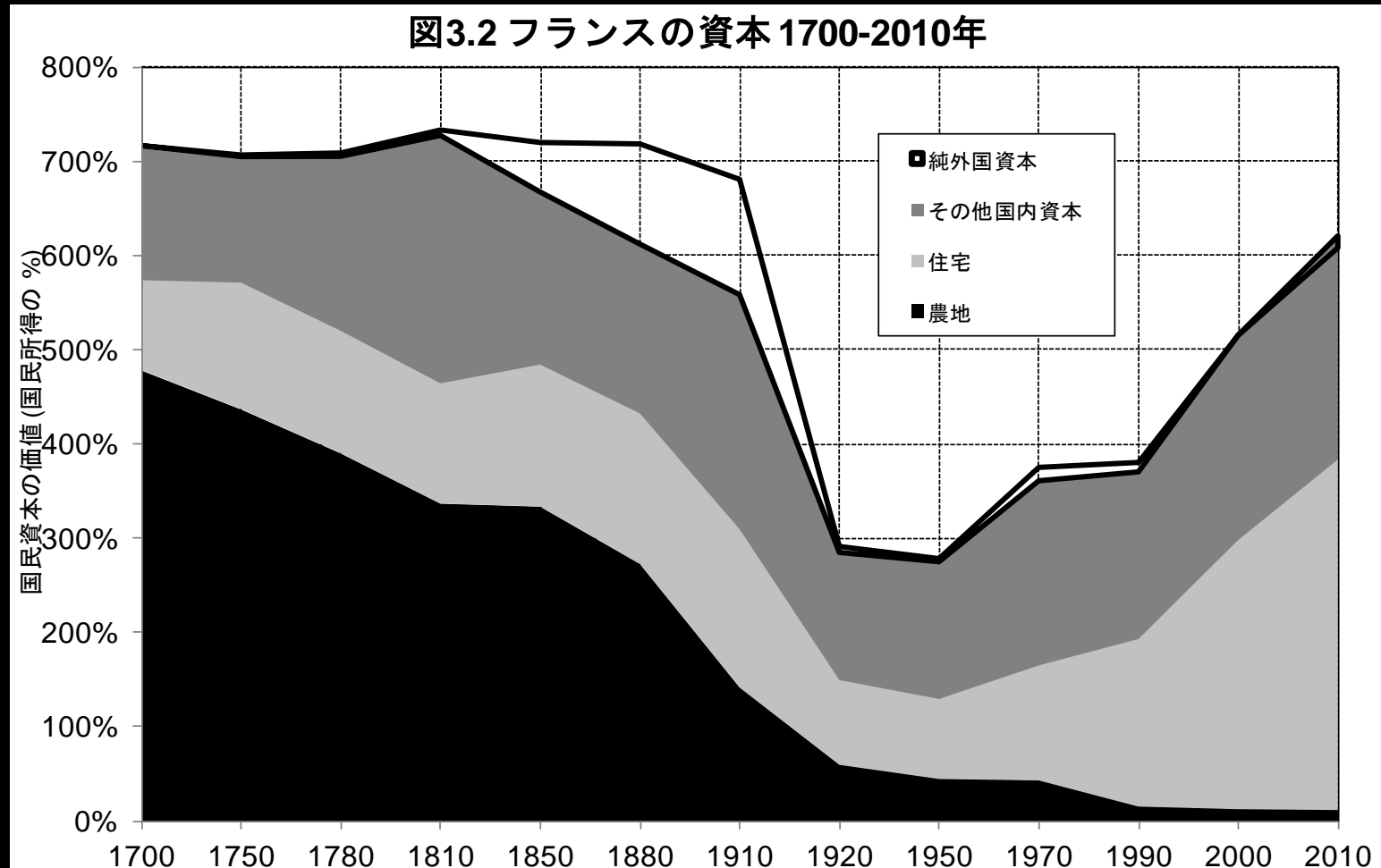
- アメリカで  $r > g$  が効かないなら、それを普遍的な根本問題だとは言えないだろ！
  - 実は本書の議論はヨーロッパ中心。第四部はほとんどがEUの問題に集中している
- $r > g$  がどうかしましたか？
  - ファイナンスなど既存経済学では、常識以前の大前提
  - 資本を持つ=投資。 $r$ が高いのはただのリスクプレミアム
- $r > g$  でも貯蓄率の想定次第で格差は拡大しません！
  - ピケティもここの批判が多いので  $r > g$  をplay downしはじめている観はある。完全に目新しい議論でないことは、本でもちょっと触れてはいるし。
  - また実際は、各種ショックを  $r > g$  が拡大するという、もうちょっと複雑なプロセスを考えているんだけど、本ではわかりやすいように単純化している面はあるらしい。

# ピケティ本批判の現在 その2

- $r$  と  $g$  が完全に独立した議論に。でも実際は、だれかが投資しないと経済も成長しない。
  - 資本税で  $r$  を下げたら投資が減って労働者の賃金も下がる。これはモデルでも示せる
- 物理・金融資本しか考えていない。人的資本が考慮されていない！
  - ピケティはそんなの恣意的にしか計測できないし、物理資本とも関連しているから考えないという。
  - でも実際に人的資本を計算した研究者によれば、資本増分の相当部分は人的資本ではないかとのこと。

# ピケティ批判の現在 その3

- 資本の増分の中身を見るとほとんどが住宅.....



1700年のフランスでは国民資本は国民所得7年分近く（うち外国投資が1年分）。

出所と時系列データ：<http://piketty.pse.ens.fr/capital21c> を参照。

# 住宅だと何が？

- 本の中では、トップ1%が金融資産や事業資産をためこんでいる、というイメージの記述。
  - でも実は一般人の住宅が質的に向上しているのが主なのか？ それっていいことではないの？
  - 都市化の進展があらわれているだけではないのか？
- 資本所有がどうあれ、その資本である住宅が競争市場で賃貸されてみんなが利用できれば問題ありますか？
- 帰属家賃の問題
  - 持ち家の価値が上がっても、その人の所得は増えない。でもピケティの計算では、それは帰属家賃として所得増加に勘定される。変では？
  - これを補正すると格差はずいぶん低くなる模様。

# その他、批判らしきもの

- *Financial Times* が、データ処理がおかしい、英米の格差はむしろ下がっていると対抗データを提示
  - すでにピケティ反論済み。データ処理の問題は補遺などで説明済みだったし、FTの対抗データは異質な情報源をつないだ恣意的なものと指摘。( <http://cruel.org/books/capital21c/> 参照)
- フェルドシュタインなどが、アメリカの税率にミスがあると指摘。税金から所得を逆算しているピケティのデータは格差を過大に見せているかも。
  - まだ明確な反論はない。が.....
  - (ホントにそんなでかい問題だったら、批判者側がその影響をビシビシ指摘して鬼の首とったみたいに騒ぐはずなんだよねー。それがないうってことは、そこまで大きな問題ではないんじゃないか、と山形は思っている。どうせアメリカにしか関係ない話だし。でもこれは、今後の精査を待ちたいし、改訂データも出してほしいところ)

# 批判を見るとき の注意

- 批判があるからピケティ本はダメとか無意味とかいうことではない。
  - － むしろちゃんとした批判があるというのは、真面目な学者や論者がそれを検討に足る真面目なものと判断しているということ。
  - － ピケティの著作や研究の意義を丸ごと否定したものは(今のところ)ない！
  - － まだ反論が出てないだけのものもある(ピケティも引っ張りだこで忙しいし.....)
- 注意点
  - － 批判も含め、議論のベースとなる資本の価値評価はかなり恣意性がある。多くの反論もピケティの議論も、かなり幅がある中での主張。
    - 一物一価とか、あらゆるものの価格は市場で厳密に決まるという発想自体がピケティも批判する数学お遊び式数理経済学につながる発想。
    - すると  $r=4-5\%$  とか資本/所得が600%とかいう数字も、実際はもっともっと雑な数字でしか示せないかも。
  - － するとつまり「どっちも一理ある」で落ち着く見通しも高い！

# その他どうでもいい「批判」

- 資本主義を否定していない！  
→(ノーコメント)
- マルクスがとっくに言っている！  
→ 本書はマルクスの主張が過去100年にはあてはまらなかったことも示している。
- 資本主義を否定する金持ち否定のアカの理屈だ！
  - 儲けも実力主義も否定していない。いちばんの標的は、遺産で喰っているボンボン。むしろ実力主義の資本主義再興を目指すとさえ言える

(その他、本書ですでに説明されていることの蒸し返しが多い！ 分厚いしデータ重視なので、アメリカでもきちんとした批判が出てくるまで半年かかった。日本でもまだ時間がかかりそう.....)



# 5. 日本への示唆とは？

- まず注意事項！
- 本書では、長期的な見方をするのが重要と言われている。2年、3年では格差の状況はわからない、一世代(30年)、少なくとも10年単位で見る必要があるとのこと。
- 数世紀にわたる全世界的な話をしている。個別国のミクロな政策を本書だけで云々するのは危険というかピントはずれになりかねない。
- そのうえで、敢えて大ざっぱな方向性について述べるなら  
.....

# まず、「アベノミクス」の評価

- 経済成長を重視
  - $r > g$  の緩和には重要。
  - ピケティ本も、1.5%はいけるとの見方。マイナス成長に甘んじるべき理由はない。
  - 特に黒田日銀の緩和は効いた(消費税率アップまでは)
  - ブラック企業の求人難、失業の低下(非正規でも失業よりはまし)なども出ている
  - 他の「成長戦略」は、期待はしないが成果が出たためっけもの
- インフレ
  - ピケティ本は、累進資本税に劣るとは言いつつも効果を認めている。
  - 黒田日銀のデフレ脱出とインフレ目標はある程度効いている
- 再分配策
  - これは弱い。特に消費税率アップは大ちゃんぽ
  - が、第二弾の引き上げは延期してくれた。
  - 相続税引き上げなど、ピケティ本的な処方箋に乗る部分もある
- 大きな方向性としては、決して『21世紀の資本』の方向性にまったく逆行するものではないと思う。

# ピケティ本はアベノミクス否定だ、という議論はどうだろう？

- 経済成長重視だから、経済成長を否定しているピケティ本の主張に逆行では？
  - 経済成長を否定はしていない。1.5%成長はできると言ってるし、日本は過去20年の積み残しがあるから短期ではもっといけるはず！
- アベノミクスは株価を上げるだけ。つまり金持ちの  $r$  を増やすだけだから格差拡大政策だ！
  - 株価も無意味に上がるわけではなく、将来の業績改善を見込んでの上昇。それが一時的に先行したからといって株価を上げる「だけ」とは言えない。
  - 株価改善は、貧乏人の年金基金運用などにも効いてくるし、貧乏人にとってもいいことあるよー。

# (余談ながら)でもなぜ「アベノミクス否定」と言われるんだらうか？

- おそらく、他の政策についての主張と同じじゃないだらうか？
- 「ピケティ教授は、デフレ脱却には金融緩和は必要条件だが十分条件ではなく、賃金をあげる方法を考えるべきと発言」(民主岡田1/30)  
[https://twitter.com/hosono\\_54/status/561162251579559938](https://twitter.com/hosono_54/status/561162251579559938)
- つまり.....
  - 金融緩和は必要である(ワイ、親アベノミクス！)
  - でも金融緩和だけだと、あれもだめ、これもだめ、不十分だ！(ほーら反アベノミクス！)
  - たいがいその後「やっぱグローバル資本税がいちばん！」ときているし.....

双方が(というか反アベノミクスを主張したがる人々が)発言の一部だけ取り出しているために、混乱が生じてるんじゃないか。やっぱ部分だけ抜き出してあれこれ言うのは不毛じゃないかな。

- Having said that, ピケティはあまりに両論併記の経済学者になりすぎてる！ 片手のピケティはいないのか！)

# (まったくの余談): アベノミクス絶賛ではない！ だからアベノミクス支持だというのは歪曲だ！ という声もありますが.....

- 山形は、そんなことはないと思ってまーす。
  - いやもちろん、100パーセント支持じゃないのは当然。ぼくから見たって安倍政権の経済政策が全部すばらしいなんて思えない。
  - でも、ダメだししている部分を見ると、完全にダメだ、やらないほうがよかった、と言ってる部分は消費税率アップだけで、どんなに悪く解釈しても「(否定はしないが)それだけではダメ」というのがほとんどでは？
  - その意味で、全否定だと主張するほうが歪曲だと思う。一部だけ抽出してる東洋経済とか日経とかは、ちょっと悪質だと思うぜ。
- Having said that....
  - ピケティ自身認めてるように、日本の状況すべてわかってるわけでもないし、政策の効果を細かく検討しているわけでもない (韓国でも中国でもスリランカでもケニヤでも「うちの政策はどうよ」って尋ねられてるんだよ。すべての国の状況をきっちり押さえているはずもないでしょう)
  - だから、インタビューとかの不十分な答弁(それも編集入りまくり)はあまり本気で受け取るべきじゃないと思うんだけどねー。本人もアベノミクスの話きかれるのにうんざりしてたみたいじゃないか(記者クラブや有楽ホールの談話とかでもそう言った)
  - 流行ってるからってだけで錦の御旗に使おうとするのは、志が卑しいぜ。
- ユーロ圏の話をきいたほうが有益だったはず！
  - 正直いって、2015/1末の来日では、ピケティには日本の話よりユーロ圏の話をきくべきだったと思う。ピケティの関心は圧倒的にそっちだから(『21世紀の資本』だって、第四部丸ごとEUのえらく細かい話ばっか！)
  - 金融緩和の評価とか、いろいろ言いたいことあったと思うぜー。
  - だれもそれをしてないというのが、日本のメディアのレベルの低さというべきか.....(紙面にでなかっただけだと思いたいところ)
  - が、閑話休題。

# 他には何か政策的示唆は？ 山形なりに思いま するに.....

- 自分で考える！ 国別に独自の歴史的経緯があり、特色があるので、それを重視しろというのもピケティ本の重要なメッセージ
  - あたりまえの話だが、「ピケティが言ってるから」ではなく、日本の状態にあわせた施策が重要。
  - 日本は、トップ1%が欧米ほど稼いで／保有していない。すると、政策的な対象もちがってくるはず。小金持ちと底辺の格差を重視したほうがいいかも？（これは飯田泰之の請け売り）
- デフレ不況20年のしわよせが若年層にきている。これは問題。失業で技能も身につかず、貧乏で結婚もできない。これは将来のgを引き下げ、人口増も阻害
  - 奨学金返済全面免除、学校教育の大幅てこ入れ、教員の待遇改善、育児手当拡充、保育園問題解消、就職支援とか  
生活保護とかも、あまりせこいこと言わずに分配してOK。こういうところに財政出動しましょう！ 財政出動＝公共事業ではない！
- それ以外も、さっき挙げた各種の格差縮小政策はどんどんやろう。
- が、これはあくまで山形の私見。

# 6. 落ち穂拾い

- 中国とかの格差はもっとすごいのでは？



# 世界で見た格差は縮まっているのでは？

- その通り。各国内での格差は高まり、国ごとの格差も増えてはいるけれど、中国インドの躍進で、貧困者は大幅に減り、全人類で見た格差は減っている。
- ピケティ本的には、これは単なる(単なる?!!)一時的なキャッチアッププロセス。
  - 短期的には格差が縮まるが、今世紀後半あたりにはキャッチアップも終わるだろうから、こうした国同士の格差縮小は止まる。あとは国内の格差だけが効いてくるとのこと。
  - だから、各国の国内格差だけに注目します、という議論で押している。



# 蛇足。

- マルサス『人口論』、ローマクラブ『成長の限界』、マルクス『資本論』.....
  - 長期トレンドを見て、それを延長して危機論を訴えた本は、しばしば外す。
    - それまでは正しくても、まさにそれが本にまとまるほど明らかになってきた時点で、すでに矯正の動きが生じていることが大きいから。格差問題はどうかろう？
    - 一方で、こうした論者が本にまとめて問題意識を育んだからこそ対応がとられた、と主張する人々もそれなりにいる。
- いまから10年後、ピケティ本はどういう評価になってるだろうか？
- 「やっぱ格差拡大した、予言的だ！」(でも対応できてない、どうしよう.....)
  - 「意外と経済成長がよくて、あんまりどうでもよかったよね〜」
  - 「資本課税はしなかったけど、チマチマいろいろ小手先でやっているうちに、格差そこそこで落ち着いたねー。騒ぎすぎだったね〜」
  - 「ガシガシ資本課税とかしちやったぜ」とはならなさそう(でも少しやってるかも)